

『出定後語』・『摺裂邪網編』における 經論引用について

——『出定後語』第一章を巡る論争を中心として——

早 島 慧

本願寺派の慧海潮音は、大乘非仏説論批判を論じる『摺裂邪網編』の著者として知られる。本書は、大乘非仏説論を論じた、富永仲基の『出定後語』に対する反駁書であり、諸研究者によって、江戸期において大乘非仏説論に対して最も学問的に反駁した書物として評価されてきた。一方の『出定後語』もまた近代的仏教学の先駆的書物として評されている。

両書は豊富な知識と典籍に依拠した書物として、文献的価値の高いものとして位置づけることができるが、中村元氏によって指摘されているように、その引用には多大な問題を抱えている。『出定後語』は多くの典籍に基づき論を展開するものの、それらの引用は不正確、あるいは誤ったものであることが多々見られる。本発表では、『出定後語』第一章とそれに対する『摺裂邪網編』の反駁を通して、両書の抱える經論引用の問題点を指摘するとともに、その背景を考察した。

『出定後語』第一章は仏教思想の発展史を考察し、各經典が仏説ではないことを論じる。このうち『法華經』が仏説ではないことを論じるにあたって、『出定後語』は『解深密經』の經名を挙げて三転法輪説を論じるが、その内容は『解深密經』における三転法輪説とは一致しない。『出定後語』の説く内容は、『華嚴五教章』等にもみられる、改変が加えられた三転法輪説と一致しており、富永は『解深密經』を直接参照することなく、『華嚴五教章』等に基づいて三転法輪説を説くと考えられる。一方、『出定後語』を批判する

『摺裂邪網編』もまた、富永の引用の不備を指摘することなく改変された三転法輪説を説いており、両者ともに『解深密経』を直接みることなく議論を行うのである。

さらに、『華嚴経』の仏説論を論じるにあたって、両書ともに『華嚴孔目章』を引用するが、『出定後語』の引用は『華嚴孔目章』と完全には一致せず、『華嚴孔目章』を引用する日本撰述文献と一致している。このことは、富永が中国撰述文献も直接参照せず、日本撰述文献からの孫引きを行った可能性を示唆している。『摺裂邪網編』もまた日本撰述文献からの孫引きを思わせる引用がみられ、両書ともに日本撰述文献からの引用に基づき議論を行った可能性が考えられる。

先行研究において、印度撰述文献を直接参照せず中国撰述文献からの孫引きを行った可能性が指摘されてきたが、本発表では日本撰述文献に基づき議論が行われた可能性を指摘した。